



## 子どもを生きるということ

皆さんの子ども時代は、どんなでしたか。僕は、毎日毎日遊びこんで（まくって）、本当に幸せだったと思っています。嫌なことはなかったのかって。ありましたよ、山ほど。子ども同士の中にだってヒエラルキーみたいなものはありますから、押しの強い子の考えが通ってしまったり、一緒に野球をやっているミスすると怒鳴られたり、互いに相思相愛ならいいけれど、自分はとても仲良しと思っても、相手はそうでもなかったりなど、様々なことがありました。

いじめのようなこともありました。数ヶ月にわたって、ずっと嫌なことを言われ続けました。自分としては、「毎日、嫌だった。」という感覚が今も残っています。よいこととは言えないですが、僕の世代の子どもは、親に話すことも、先生に相談することも「卑怯者」のやることとされていて（子どもたちの中で）、誰にも相談せずに、悶々としていました。そしてとうとう最後には、取っ組み合いのけんかをして、相手を殴り、殴られ、一件落着きました。この時、僕は「自分で考えて、決めてそうした」ことで、解決できたことがとてもうれしかったことを覚えています。

間違はなく僕は、「子ども」を生きていました。無理に背伸びさせられたり、必要以上に保護されたりもせずに、自分の思いのまま、好きなことを好きなだけやりました。と同時に、様々な「嫌なこと」「苦しいこと」に耐えながらどうすべきかを悩んでいました。まさに、遊びや生活の中で「自分で考え判断して、行動」していたのです。

恐らく、僕と同年代或いは上の世代の方々は、こういう過ごし方を子ども時代に経験してきていると思います。日本には、学歴はないけれども一線で活躍した方がいらっしゃいます。ホンダの創業者の本田宗一郎さんは、小卒。経営の神様と言われた松下幸之助さんは、小中退。内閣総理大臣まで務められた田中角栄さんは、中卒です。不思議に思いませんか。彼らは、その力をどこで身に付けたのでしょうか。残念ながら学校でないことは明白です。「経営の神様」は、なんと小4までしか学校に行っていなかったそうです。小4の学習内容で「経営の神様」と呼ばれますか。もちろん独学で様々なことを学ばれたことは間違いないと思います。しかし、その素養を養ったのは・・・、「遊びと生活」だったと考えるのが自然です。

少し整理しましょう。現代の子どもたちと昔の子どもたち、何が違うのでしょうか。どこが違っ

てきているのでしょうか。思いつくままに挙げてみますね。

- ・放課後遊びの時間の減少（習い事等の増加）
- ・カリキュラムオーバーロード（学校で過ごす時間の増大）
- ・遊び場所の変化（自分たちで働きかけられる空間の減少）
- ・遊びの変化（工夫の余地のない遊びの増加）
- ・子ども世界への大人の干渉の増加  
（子ども世界の辛辣さの喪失）

いかがでしょうか。前回のたよりでも書きましたが、「遊び」の時間・場所・質の変化が大きな違いだとまとめられそうです。その環境の中で担保されていたのは、何回もお話ししている「子どもが、自分で考え判断して、行動する」ことなのです。では、どうすればよいのか。何を大切にしていけばよいのか考えてみましょう。

まず、学校の時間が長いということは、学校の在り方が問われます。如何に子どもに考えさせるのか、子ども主体の学びをどう創り出すのか、学びの中で、生活の中で「自分で考え判断して行動する」ことを大切にして、「子ども主体の学校づくり」を進めなければなりません。

次に、「遊び」の再評価です。「遊び」と「習い事」だったら、「習い事」の方が子どもの学びになるとお考えではないでしょうか。しかし、自由に「遊びこむ」ことが実は非常に大きな教育効果をもたらします。ただし、その「遊び」の質については考えなければなりません。そこには、自分なりの考えや工夫を入れ込める余地のあるものであることが必要です。難しいのは、「遊び」とは子どもが自由に自分のやりたい事をする事なので、子どもがそういった遊びを選び取るかどうかという問題があります。子どもにそういった「遊び」を経験してもらう入り口の設定は必要なのかもしれません。

最後に、子どもの身に起こる様々な事に寄り添ったり共感したりはしても、その出来事に対してどうアプローチするかは、子どもに「考え、判断、行動」させることです。子どもが嫌だと感じていることならなおさら、自分でアクションして解決できれば、自分自身への信頼や自己効力感が上がることとなります。保護者や養育者は、その伴奏者として相談に乗り、感情を立て直しつつ見守ることだけでよいのです。

僕は今、子ども時代は本当にかげがえのない時間だったと思っています。そして、すべての子どもたちが、「遊び」を生活の真ん中において「子ども」を（として）生きることを願ってやみません。